

# 律令国家前夜

遺跡から探る飛鳥時代の大変革

前園実知雄 [著]

新泉社

## はじめに

三世紀から四世紀のはじめにかけて、大和盆地の東南部に成立したとみられるヤマト政権の中樞は、その権力の象徴として造られた巨大な前方後円墳を築く地域内を移動することはあったが、『古事記』『日本書紀』に記された崇神から崇峻までの二三代のうち一九代の大王たちは約三百年間、その宮を三輪山を望むことのできる盆地東南部に置いたとみられる。

考古学的な根拠はまだ少ないが、雄略の泊瀬朝倉宮はつせあさくらのみやは、桜井市の脇本遺跡わきもとの可能性がある。また、同じく桜井市の纏向遺跡まきむくで発掘された整然とならぶ建物群に重なって五世紀代の濠の一部がみえることから『日本書紀』に記載されている纏向の名の付く複数の大王の宮の一部がそこに置かれたのではないかと私は考えている。

そのような歴史のなかで、推古天皇は五九二年に飛鳥の豊浦宮とよらのみやで即位した。この時をもって飛鳥時代が始まる。その後六九四年に持統天皇が藤原宮へ遷宮するまで、孝徳天皇の難波宮、天智天皇の大津宮への短期間の遷宮はあったが、基本的に王宮は飛

鳥の狭い盆地の中に営まれた。

私はこの飛鳥での王宮の開始は、古代史の大きな転換点と捉えている。飛鳥の盆地に立てばすぐわかるが、そこからは古来、神の山として信仰されてきた三輪山を直接望むことはできない。つまり、三輪山信仰から新しい信仰を背景とした統治の形へ踏み出したということができよう。その背後には、推古天皇の出自でもある蘇我氏の存在があることは言うまでもない。

推古天皇が即位した豊浦宮から元明天皇が平城京へ遷都した七一〇年までの百年余りの飛鳥時代に、上宮王家の滅亡、乙巳いっしの変、壬申じんとの乱などのさまざまな事件を経て、律令国家としての日本が誕生した。

この飛鳥時代を飛鳥、斑鳩に残る遺跡、すなわち歴代の王宮、大王や豪族の建立した寺院、数少ない終末期の古墳などを通して考えてみたい。

なお、天皇号は天武・持統天皇以後であると考えられるが、本書では便宜上漢風諡号を使用する。

律令国家前夜  
目次

## 飛鳥

三輪山との別離 飛鳥へ遷る王宮 ..... 13

三輪山の麓に置かれた王宮 13

蘇我氏の台頭 16

飛鳥に置かれた最初の宮 豊浦宮・小墾田宮 18

新たな政権をめざす舒明天皇 岡本宮・田中宮・厩坂宮・百濟宮 21

乙巳の変の舞台 皇極天皇の飛鳥板蓋宮 27

飛鳥を離れる孝徳天皇 難波長柄豊碓宮 29

再び飛鳥へ 斉明天皇の後飛鳥岡本宮 34

飛鳥から近江へ 天智天皇の近江大津宮 39

大海人皇子の即位 飛鳥浄御原宮 45

新たな都 藤原京 47

新しい信仰 飛鳥の寺院 ..... 57

仏教伝来 57

日本最古の伽藍寺院 飛鳥寺 60

最古の尼寺 豊浦寺 68

斉明天皇ゆかりの寺 川原寺 71

聖徳太子の上宮跡か 橘寺 76

蘇我倉山田石川麻呂の寺 山田寺 79

最初の大官大寺 百濟大寺 82

二つの大官大寺 93

初期密教と義淵 岡寺 99

東漢氏の寺 檜隈寺 102

国の仏教へ 105

王たちの奥津城 ..... 107

飛鳥の終末期古墳 107

◆飛鳥時代前期の古墳 109

三基の大型方墳 石舞台古墳・都塚古墳・塚本古墳 110

推古天皇の初葬地 植山古墳 118

みごとに切石横穴式石室 岩屋山古墳 123

母と妹のために 牽牛子塚古墳・越塚御門古墳 129

蘇我氏のたそがれ 小山田古墳・苜蒲池古墳 136

◆飛鳥時代後期の古墳 145

藤原宮の中心線にある古墳 野口王墓古墳 145

草壁皇子の墓 東明神古墳 153

人物像と四神を描いた石槨 高松塚古墳 157

壁画のない古墳 マルコ山古墳 163

もうひとつの壁画古墳 キトラ古墳 166

文武天皇の墓 中尾山古墳 171

飛鳥の古墳が意味するもの 175

## 斑鳩

### 律令国家前夜 厩戸皇子の斑鳩京……………

179

古代の斑鳩 179

斑鳩宮の発見 182

再建された法隆寺 194

二つの創建説をもつ法輪寺 207

法起寺と岡本宮 211

中宮寺と中宮・葦垣宮 217

### 上宮王家の奥津城……………

225

斑鳩の古墳 225

古墳時代後期の古墳 仏塚古墳 227

盗掘をまぬかれた古墳 藤ノ木古墳 228

藤ノ木古墳と法隆寺をつなぐ古墳 春日古墳 241

上宮王家の奥津城 御坊山古墳群 242

藤ノ木古墳と御坊山古墳群のもつ歴史の意味 247

斑鳩が語るもの 250

## 大王家の系譜

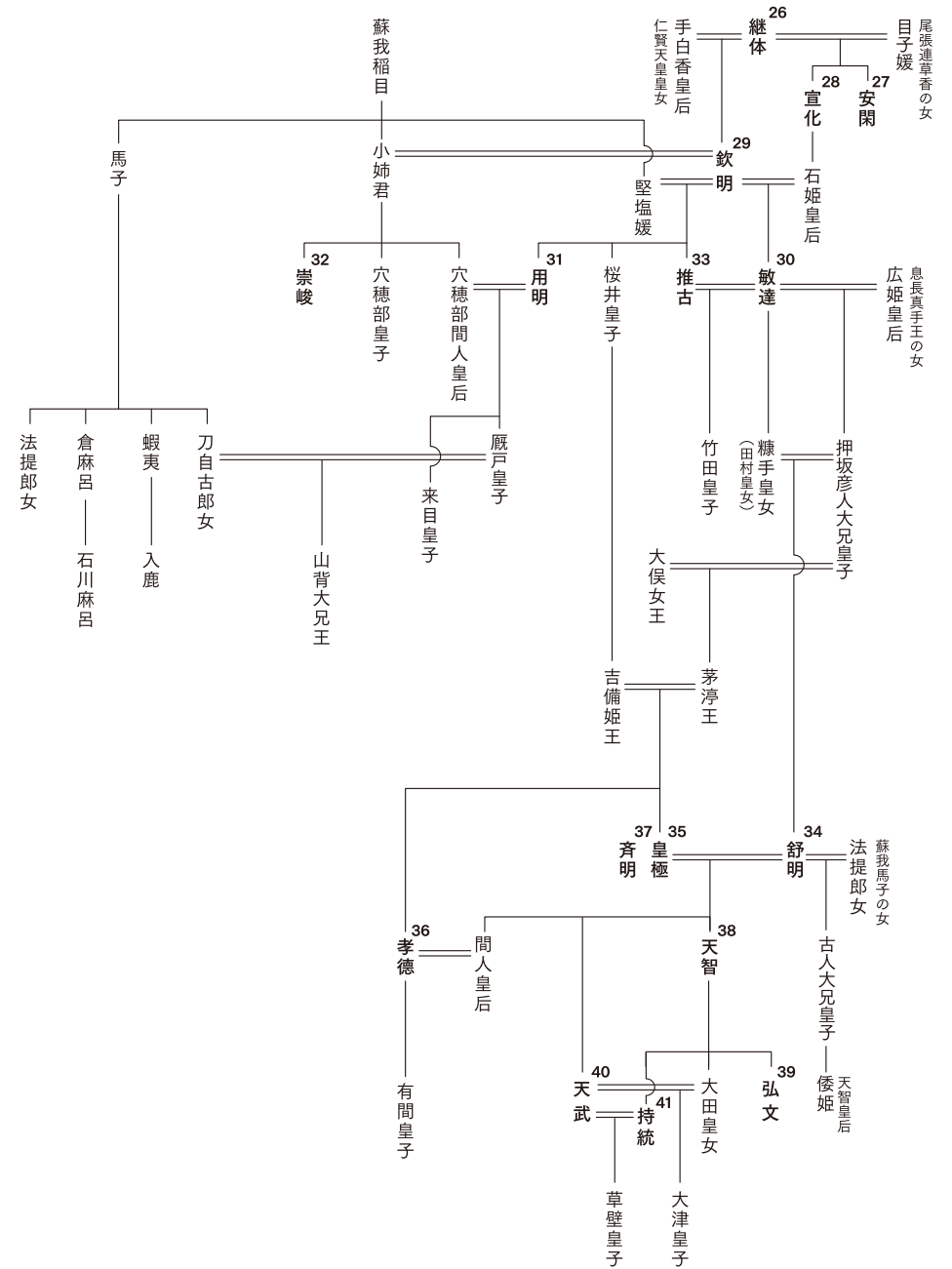
継体天皇の系譜 254

大王家・蘇我氏・息長氏の暗闘 260

蘇我氏打倒 267

律令国家誕生 271

# 大王家と蘇我氏の系譜



飛鳥

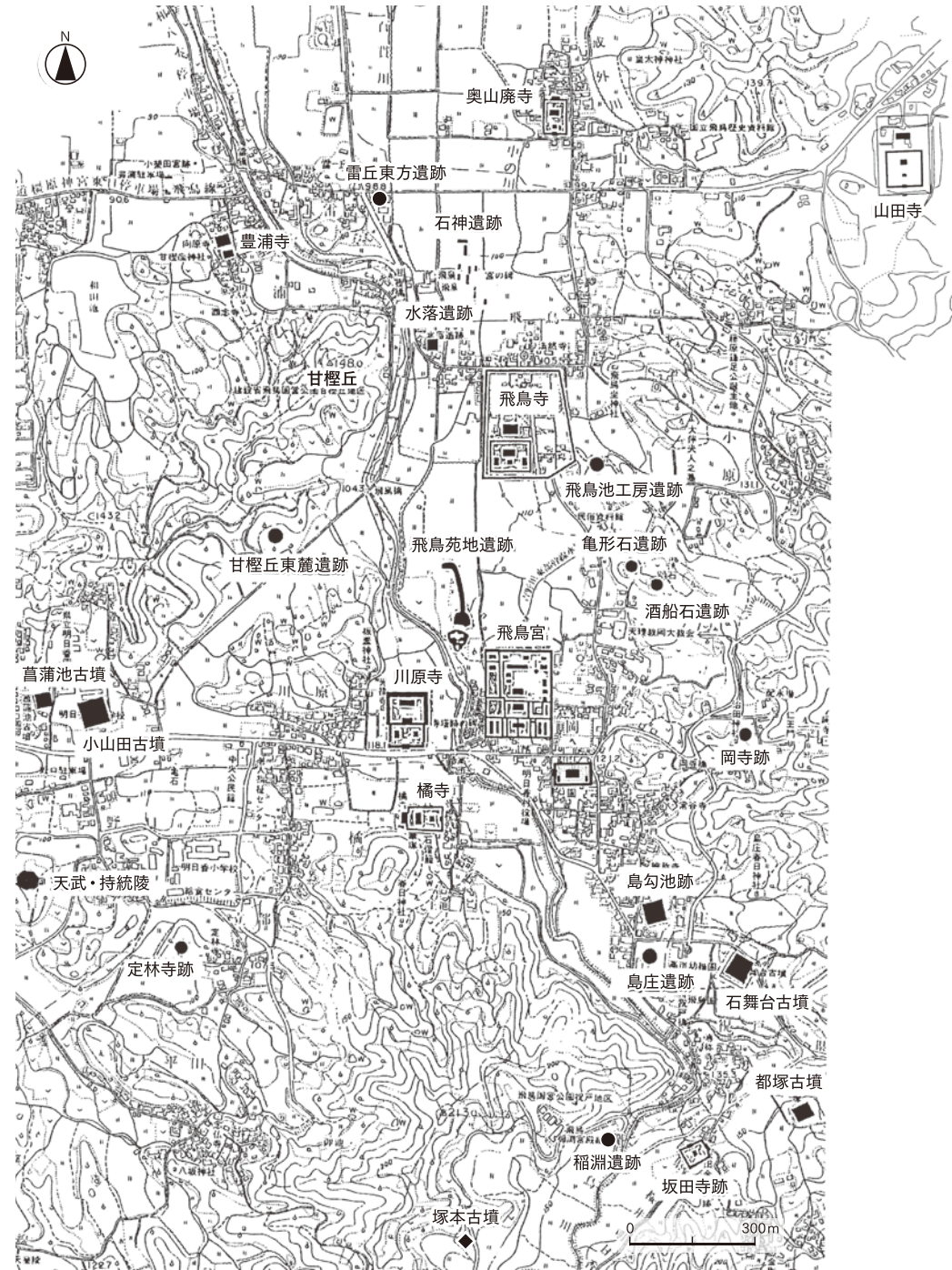


図1 飛鳥の宮・寺・古墳

## 三輪山との別離 飛鳥へ遷る王宮

### 三輪山の麓に置かれた王宮

『古事記』『日本書紀』に記されたヤマト政権の大王（天皇）の宮の多くは、秀麗な山容から山自体が信仰の対象とされていた三輪山の麓、もしくははその山を眺めることのできる地域、いわゆる磯城・磐余の地域に営まれていた（表1）。

崇神天皇から用明天皇までの、実に一三カ所に及ぶ宮室がこの地域に存在した可能性がある。しかし、近年、考古学の調査によって、その実態が次々と明らかにされている飛鳥地域の宮に対して、その直前まで存在した磯城・磐余地域の宮は、考古学的に立証され、確定した遺跡はまだ知られていない。そこで、考古学を中心に発掘調査をおこなって実態に迫ってみようと、一九八四年二月に「磯城・磐余の諸宮調査会」（池田栄三郎会長）が結成された。事前の踏査などによって、最初の候補地となったのが、実在が確実視されている雄略天皇の宮とされる泊瀬朝倉宮だった。